

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 1 日現在

機関番号：82610

研究種目：基盤研究（B）（海外学術調査）

研究期間：2010～2012

課題番号：22406037

研究課題名（和文） 精神障害者の社会参加効力感とその関連因子の国際比較

研究課題名（英文） International comparison about the factors related to self-efficacy for social participation of people with mental illness

研究代表者：

天谷真奈美（AMAGAI MANAMI）

独立行政法人国立国際医療研究センター・国立看護大学校・教授

研究者番号：00279621

研究成果の概要（和文）：精神障害者社会参加効力感尺度(SESP)は27項目からなる、精神障害者の社会参加に対する自己効力感（自信）の強さを測定する尺度である。本研究では、我が国の精神障害者の社会参加自己効力感とその関連要因の実態とその特徴をより客観的に理解できるよう国際比較を行った。日本と中国のどちらにおいても年収が関連因子であり、様々な社会参加の形が認められる一方で、やはり社会に参加していくにあたり、年収あるいは就労の有無という因子は影響要因として考えていく必要があると思われた。また、日本で自尊感情や生活全般の満足度が関連因子であった。そのため、日本においては社会参加に対する自己効力感に限らず、一般性自己効力感を高めていく支援や自尊感情を高める支援が社会参加を進める上で有効である可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The instrument in the form of a mental illness scale (SESP) to measure self-efficacy in social participation consists of 27 items. It is the strength of self-efficacy for social participation of persons with mental disabilities of (confidence).

In this study, in order to understand the characteristics of the relevant factors and social participation self-efficacy of the mentally ill in our country, we were compared internationally.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2010年度 | 1,800,000 | 540,000 | 2,340,000 |
| 2011年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 2012年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 総計 | 4,400,000 | 1,320,000 | 5,720,000 |

研究分野：精神看護学・精神科リハビリテーション学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：社会参加・精神障害者・自己効力感・国際比較・尺度開発

1. 研究開始当初の背景

精神障害者の社会参加を促進するには、精神科訪問看護や包括的地域生活支援などの環境的な支援体制が重要だが、さらに個人的な要因として精神障害者自身が社会参加や地域生活に対する自己効力感(自信)を持つ

ことも社会参加の実際に影響することが指摘されてきた。

そこで我々は先の研究で、精神障害者の精神障害者の社会参加に対する自己効力感(自信)の強さを測定することができる尺度を日本で開発した。それにより我が国の精神障害

者の傾向を知ることが可能になると同時に、様々な精神科リハビリテーションプログラムの効果判定等の指標として活用することを可能とした。

これまで日本の精神障害者は入院在院日数が諸外国に比較して圧倒的に長く、地域社会に定着するまでの困難を克服することが課題であった。だが、その個人的背景として我が国の精神障害者の社会参加自己効力感の傾向は諸外国と比較して、どのようなものか、どの程度の特徴があるのかどうかは明らかになっていない。

精神障害者の社会参加自己効力感には個人的特性のみならず、その個人を取り巻く家族関係、社会文化的特性、精神保健医療福祉システムおよび看護体制などの環境要因が影響することが推察できるが、それぞれの国によって何が影響するのかについても明らかになっていない。このように個人要因と環境要因を網羅した上での SESP 関連因子について、十分な検討が未だなされていない。

我が国の精神障害者の社会参加自己効力感とその関連要因の実態とその特徴を理解するには、それらを客観視できるよう他国との比較検討が不可欠である。国際比較により、我が国の精神障害者の社会参加自己効力感と関連要因の特徴を明らかにし、社会参加自己効力感を育む支援を考える上で有益な示唆を得たいと考えた。

2. 研究の目的

精神障害者の社会参加効力感とそれに影響を及ぼしうる関連因子について国際比較によりその傾向を明らかにし、我が国の精神障害者の社会参加促進に向け、今後の精神保健医療福祉における有用な示唆を提案することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 比較国の選定

①比較対象国候補として米国・アジア（中国）・欧州（ハンガリー）の精神医療事情について理解するため文献検討・フィールドワーク・現地精神科医療関係者との専門家会議を実施した。②①の検討結果から文化的に近いことと、日本との比較調査を着実に実施するために、比較国を中国に絞り込んだ。

(2) 中国版の精神障害者社会参加自己効力感尺度の開発

①先に研究者らが開発した日本版の精神障害者社会参加自己効力感尺度について、日本に長期在住の中国人看護研究者複数名に翻訳あるいはバックトランスレーションを依頼した。②内容的妥当性確保に向けた専門家会議とパイロットスタディを行い、項目分析による質問項目の適切性の検討、因子分析による会尺度の構成確認、クロンバック α 信頼

係数算出による内的整合性の検討、SESP 関連尺度による構成概念妥当性の検討を行った。

(3) 精神障害者社会参加自己効力感の日の現状および関連する因子の解明

①文献検討を行い、精神障害者社会参加自己効力感に關係する可能性の高い変数を抽出し、研究の概念枠組みを構築した。他の測定尺度として自尊感情尺度、精神的健康度 GHQ、SOC を用いた。

②精神障害者社会参加自己効力感尺度開発のために収集した日中両国のデータを用い、変数「精神障害者社会参加自己効力感」への回答に関し統計学的分析を行った。

③概念枠組みが包含する変数と精神障害者社会参加自己効力感の關係を統計学的に分析した。

4. 研究成果

(1) 研究対象者

日本と中国、国別の対象者の基本属性、自尊感情尺度得点、SOC 得点、GHQ 得点、大切な人の人数、生活満足度、総合健康度は表 1 の通りであった。

日本の対象者は統合失調症が 7 割程度を占めている一方で、中国の対象者は統合失調症 5 割程度、気分障害 4 割弱であった。

また中国の対象者は 3 割程度の者が常勤職に就いている一方で、日本の対象者は 0.3 割の者しか常勤職に就いていなかった。

自尊感情尺度得点、SOC 得点、GHQ 得点、家族の關係に対する満足度以外の満足度は中国の対象者の得点が高かった（GHQ 得点は低かった）。

表 1 国別の対象者の基本属性、自尊感情、SOC、GHQ 得点、大切な人の人数、生活満足度、総合健康度

| | 日本 N = 139 | 中国 N = 117 | | |
|---------|---------------|---------------|------------|---------|
| | 平均(標準偏差) | | t | |
| 年齢 | 38.8(10.7) | 36.0(14.2) | 1.42 | |
| 発病年齢 | 23.0(8.4) | 29.4(12.5) | -4.65** | |
| 罹病期間 | 15.8(11.3) | 7.2(8.0) | 6.11** | |
| 入院回数 | 1.71(2.0) | 1.96(2.7) | -0.84 | |
| 子供の数 | 0.18(0.53) | 0.55(0.78) | -3.79** | |
| 自尊感情 | 24.3(5.2) | 29.8(5.4) | -8.22** | |
| SOC | 49.6(12.9) | 61.5(14.5) | -6.78** | |
| GHQ | 15.5(6.9) | 13.5(7.3) | 2.22* | |
| 総合健康度 | 2.61(0.8) | 2.67(0.9) | -0.57 | |
| 大切な人の人数 | 6.05(4.5) | 3.53(3.3) | 5.00** | |
| 満足度 | 生活全般 | 2.52(0.89) | 2.91(0.78) | -3.78** |
| | 友人との関係 | 2.58(0.88) | 2.98(0.81) | -3.85** |
| | 家族との関係 | 2.83(0.92) | 3.00(0.84) | -1.57 |
| | 地域住民との関係 | 2.56(0.78) | 3.0(0.79) | -4.13** |

| | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|----------|
| | 自分自身 | 2.26(0.94) | 2.85(0.86) | -5.24** |
| | 合計得点 | 12.7(3.1) | 14.7(3.2) | -4.92** |
| | | 度数(%) | | χ^2 |
| 性別(男性) | | 89(65.4) | 56(47.9) | 7.94** |
| 診断名 | 統合失調症 | 100(73.5) | 56(48.3) | 30.3** |
| | 気分障害 | 12(8.8) | 43(37.1) | |
| | アルコール・薬物依存 | 2(1.5) | 2(1.7) | |
| 入院歴(有) | | 97(69.3) | 77(66.4) | 0.25 |
| 宗教(有) | | 36(25.5) | 24(20.5) | 3.20 |
| 同居家族(有) | | 100(72.5) | 101(87.1) | 8.14** |
| 婚姻状況(既婚) | | 9(6.4) | 59(50.4) | 75.5** |
| 公的保障の受給(有) | | 94(69.2%) | 10(8.5) | 108.9** |
| 経済状況 | ゆとりあり | 9(7.6) | 11(9.5) | 3.58 |
| | 少しゆとりあり | 32(26.9) | 24(20.7) | |
| | 少々苦しい | 39(32.8) | 50(43.1) | |
| | 苦しい | 39(32.8) | 31(26.7) | |
| 生活目標(有) | | 102(76.1) | 96(82.8) | 1.66 |
| 社会的役割 | 常勤 | 4(2.9) | 36(31.0) | 160** |
| | パートタイム勤務 | 9(6.5) | 8(6.9) | |
| | 専業主婦・主夫 | 3(2.2) | 15(12.9) | |
| | 社会復帰訓練施設 | 48(34.5) | 0(0) | |
| | 自宅内活動 | 9(6.5) | 7(6.0) | |
| | 失業中 | 6(4.3) | 16(13.8) | |
| | 学校 | 0(0) | 7(6.0) | |
| | デイナイトケア | 54(38.8) | 0(0) | |
| その他 | 6(4.3) | 27(23.3) | | |
| 生活機能自立度 | 自立 | 87(68.0) | 84(71.8) | 2.46 |
| | 一部介助 | 29(22.7) | 28(23.9) | |
| | ほとんど自分でできない | 12(9.4) | 5(4.3) | |

有意差の確認された項目の背景を黄色で、有意確率5%未満のものを*、1%未満のものを**で示す。

(2) 社会参加効力感の国際比較

日本と中国の対象者の社会参加効力感尺度得点は表2の通りであった。中国の対象者は、全ての下位尺度得点および合計得点で日本の対象者より有意に得点が高かった。

表2 国別の社会参加効力感尺度得点

| | 日本 | 中国 | t |
|--|----|----|---|
|--|----|----|---|

| | | | |
|-----------|------------|------------|---------|
| 社会的自己への信頼 | 18.7(5.4) | 24.2(5.5) | -7.95** |
| セルフマネジメント | 18.2(4.8) | 22.6(4.4) | -7.42** |
| 社会適応力 | 17.8(4.9) | 22.3(5.1) | -7.12** |
| 相互支援 | 13.7(3.6) | 15.8(3.7) | -4.39** |
| 合計 | 68.6(17.6) | 84.8(17.6) | -7.20** |

有意差の確認された項目の背景を黄色で、有意確率5%未満のものを*、1%未満のものを**で示す。

(3) 社会参加効力感関連因子の国際比較

① 国別の社会参加効力感尺度得点と関連因子の相関

日本と中国の国別の社会参加効力感尺度得点と関連因子の相関関係は表3の通りであった。

日本においては年収よりも経済状況(主観的経済状況)が社会参加効力感尺度得点に関連があった。

中国においては、大切な人の人数が日本においてより、社会参加効力感尺度得点に強い関連がみられた。

表3 国別の社会参加効力感尺度得点と関連因子の相関係数(Pearson's R)

上段: 日本, 下段: 中国

| | 下位尺度 | | | | |
|-------------|-----------|-----------|---------|---------|---------|
| | 社会的自己への信頼 | セルフマネジメント | 社会適応力 | 相互支援 | 合計 |
| 年齢 | 0.19* | 0.20* | 0.11 | 0.10 | 0.15 |
| | -0.07 | -0.04 | -0.16 | -0.12 | -0.11 |
| 年収 | 0.19 | 0.14 | 0.24* | 0.13 | 0.19 |
| | 0.26* | 0.19 | 0.23* | 0.18 | 0.23* |
| 経済状況 | -0.32** | -0.29** | -0.28** | -0.33** | -0.31** |
| | -0.24* | -0.07 | -0.10 | 0.02 | -0.12 |
| 生活機能自立度 | -0.18* | -0.24** | -0.20* | -0.15 | -0.21* |
| | -0.33** | -0.30** | -0.40** | -0.34** | -0.37** |
| 自尊感情尺度得点 | 0.83** | 0.81** | 0.74** | 0.75** | 0.84** |
| | 0.63** | 0.58** | 0.61** | 0.57** | 0.64** |
| 生活全般(満足度) | 0.50** | 0.49** | 0.44** | 0.50** | 0.51** |
| | 0.53** | 0.50** | 0.36** | 0.34** | 0.47** |
| 友人との関係(満足度) | 0.45** | 0.45** | 0.41** | 0.47** | 0.47** |
| | 0.56** | 0.55** | 0.46** | 0.48** | 0.55** |
| 家族との関係(満足度) | 0.26** | 0.25** | 0.29** | 0.37** | 0.31** |
| | 0.50** | 0.46** | 0.36** | 0.49** | 0.48** |

| | | | | | |
|---------------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 地域住民との関係(満足度) | 0.36** | 0.37** | 0.37** | 0.44** | 0.42** |
| 自分自身(満足度) | 0.70** | 0.62** | 0.59** | 0.65** | 0.70** |
| 満足度合計得点 | 0.64** | 0.60** | 0.59** | 0.67** | 0.67** |
| SOC得点 | 0.53** | 0.53** | 0.48** | 0.46** | 0.54** |
| GHQ得点 | -0.56** | -0.56** | -0.52** | -0.52** | -0.57** |
| 総合健康度 | 0.43** | 0.43** | 0.37** | 0.35** | 0.43** |
| 大切な人の人数 | 0.19* | 0.09 | 0.18* | 0.24** | 0.18* |

日本と中国で、(有意な)相関関係にちがいがみられた項目の背景をピンクで、有意確率5%未満のものを*、1%未満のものを**で示す。

②国別の基本属性等群別の社会参加効力感尺度得点の比較

性別、診断名、入院歴の有無、同居家族の有無、宗教の有無、婚姻状況、社会的役割、居住環境、使用している社会資源、公的保障の受給の有無、生活目標の有無の群間に社会参加効力感尺度得点に差がないか国別に検討した。結果、日本と中国において生活目標の有無によって社会参加効力感尺度得点に有意差がみられ、生活目標のある群が有意に得点が高かった。また中国において、信じる宗教のある群は、ない群に比べて有意に得点が高かった。

③国別の社会参加効力感と関連因子の検討

社会参加効力感尺度得点を従属変数、社会参加効力感尺度得点と関連のみられた因子を独立変数として投入し、変数減少法で重回帰分析を行った。社会参加効力感尺度得点と関連がみられ、独立変数として投入したのは、次の変数である。自尊感情尺度得点、SOC得点、GHQ得点、大切な人の人数、生活満足度(生活全般、友人との関係、家族との関係、地域住民との関係、自分自身、合計得点)、宗教の有無、年齢、生活機能自立度、経済状況、年収、生活目標の有無、総合健康度。

日本の対象者における重回帰分析の結果、重回帰式の R^2 は 0.82 であり、有意な関連の確認された因子は、自尊感情尺度得点、生活全般の満足度、年収(表4)であった。

表4 日本の対象者における社会参加効力感尺度得点を従属変数とした重回帰式の独立変数と標準化係数

| 項目 | 標準化係数(β) | t | P |
|----------|------------------|-------|------|
| 自尊感情尺度得点 | 0.795 | 11.81 | .000 |
| 生活全般の満足度 | 0.202 | 3.14 | .003 |
| 年収 | 0.149 | 2.70 | .009 |

中国の対象者における重回帰分析の結果、重回帰式の R^2 は 0.78 であり、有意な関連の確認された因子は、宗教の有無、生活機能自立度、地域住民および自分自身への満足度、GHQ得点、年収(表5)であった。

表5 中国の対象者における社会参加効力感尺度得点を従属変数とした重回帰式の独立変数と標準化係数

| 項目 | 標準化係数(β) | t | p |
|---------------|------------------|-------|------|
| 生活機能自立度 | -0.117 | -2.45 | .017 |
| 地域住民との関係への満足度 | 0.277 | 3.90 | .000 |
| 自分自身への満足度 | 0.186 | 2.53 | .014 |
| 生活目標の有無 | -0.259 | -3.71 | .000 |
| GHQ得点 | -0.305 | -3.89 | .000 |
| 年収 | 0.177 | 2.91 | .005 |

日本と中国のどちらにおいても年収が関連因子であった。我々の過去の研究において、就労に就いている者は社会参加効力感が高いということが明らかになっている。様々な社会参加の形が認められる一方で、やはり社会に参加していくにあたり、年収あるいは就労の有無という因子は影響要因として考えていく必要があると思われる。

日本においては自尊感情や生活全般の満足度が関連因子であった。そのため、日本においては社会参加に対する自己効力感に限らず、一般性自己効力感を高めていく支援や自尊感情を高める支援が社会参加を進める上で有効である可能性が示唆された。

一方、中国においては、生活機能自立度、GHQ得点、地域住民との関係・自分自身への満足度、生活目標の有無が関連因子であった。生活機能や健康状態への支援、生活目標の設定など、具体的な支援が社会参加を促進するのに有用である可能性が示唆された。

(5) 今後の課題

これまで明らかにされていない日本の精神障害者の社会参加自己効力感と関連要因に関して詳細に国際比較を中国との比較で初めて行った。これらから、日本の精神障害者の特徴を踏まえた支援モデルを考える上でより客観的学術的実践的に有効な知見を得ることができた。今後は比較対象国を東アジア複数国に拡張する海外学術調査を意識し、今後着実に実施できるような環境条件を整えたいと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- 1) Amagai Manami, Suzuki(Hiroshima) Mayo, Shibata Fumie, Tsai Jack: Development of an instrument to measure self-efficacy for social participation of people with mental illness. Arch Psychiatr Nurs 26: 240-248, 2012
- 2) Suzuki(Hiroshima) Mayo, Amagai Manami, Shibata Fumie, Tsai Jack: Factors related to self-efficacy for social participation of people with mental illness. Arch Psychiatr Nur 25: 359-365, 2011
- 3) 柴田文江, 鈴木(廣島)麻揚, 天谷真奈美: 精神障害者の「社会復帰」と「社会参加」-用語に関する諸問題-. 病院・地域精神医学 54: 100-109, 2011

[学会発表] (計6件)

- 1) Amagai Manami, Suzuki(Hiroshima) Mayo, Itayama Minoru, Shibata Fumie: The social participatory processes of schizophrenic people and their influencing factors. The Joint Scientific Meeting of IEA Western Pacific Region and Japan Epidemiological Association,

2010.1.9-10, Saitama

- 2) Amagai Manami, Suzuki(Hiroshima) Mayo, Shimizu Chika, Nitta Mayumi, Takahashi Makiko, Shibata Fumie: Examination of the reliability and criterion-related validity of the short version of self-efficacy for social participation for people with psychiatric disabilities scale. 20th World Congress of World Association for Social Psychiatry, 2010.10.23-27, Marrakech
- 3) Suzuki(Hiroshima) Mayo, Amagai Manami, Shimizu Chika, Nitta Mayumi, Takahashi Makiko, Shibata Fumie: Self-efficacy for social participation of people with psychiatric disabilities and its connection to economic conditions and level of life functional independence. 20th World Congress of World Association for Social Psychiatry, 2010.10.23-27, Marrakech
- 4) Amagai Manami, Suzuki(Hiroshima) Mayo, Shimizu Chika, Nitta Mayumi, Takahashi Makiko, Shibata Fumie: A Study for Factorial Validity of the Short Version of the Self-Efficacy for Social Participation for People with Psychiatric Disabilities Scale. The 11th International Congress of Behavioral Medicine, 2010.8.4-7, Washington DC
- 5) Amagai, Manami, Li, Conghong, Kobayashi, Noriko, Hiroshima, Mayo: The relationship between the sense of coherence and social participation

among mental disabilities in Japan and China. The 12th International Congress of Behavioral Medicine, 2012. 8. 29-9. 1, Budapest

- 6) Hiroshima Mayo, Amagai Manami, Kobayashi Noriko, Sakuraba Shigeru : Relationship between Social Support and Sense of Coherence of People with Psychiatric Disabilities. The 12th International Congress of Behavioral Medicine, 2012. 8. 29-9. 1, Budapest

6. 研究組織

(1) 研究代表者

天谷真奈美 (AMAGAI MANAMI)
独立行政法人国立国際医療研究センター・その他部局等・研究員
(国立看護大学校・教授)
研究者番号 : 00279621

(2) 研究分担者

廣島 麻揚 (HIROSHIMA MAYO)
京都大学大学院・医学研究科・准教授
研究者番号 : 60336493

(3) 研究分担者

小林 悟子 (KOBAYASHI NORIKO)
独立行政法人国立国際医療研究センター・その他部局等・研究員
(国立看護大学校・講師)
研究者番号 : 00389800